

第5章 マレーシアのエスニック・グループとナショナリズムに関する考察

はじめに

エスニック・グループは同一の出自・地縁・血縁、歴史的伝統、風俗・習慣、言語、あるいは宗教、文化などを共有しているという共属意識で結ばれた集団であるのに対して、国民は国家の構成員となっている集団、さらに同一の国家の構成員たることを自覚し政治的一体感、国民意識を抱いている集団であるといえよう。しかし、もしも一つの民族が一つの国家を形成してその国民となるならば、また国内の諸民族の融合や同化が進んで一つの民族へと統合されるならば、民族と国民は一体化して同じものと見なされる。18世紀ヨーロッパの一角に出現したこの国家類型—実はその疑似形態—が近代国家の理想型ないし普遍的なモデルであるかのように信じこまれ、政治神話としてヨーロッパから世界中へと伝播し猛威を振るってきたとされる¹。これに対し、市民革命以後、国家君主の主権は国民主権へとおきかえられ、国家の構成員が同じ国民であるという意識、すなわち政治的一体感としての国民意識を抱いている国家が発生する。国家と国民とが一体化し同一視されるようになる。しかし、第2次世界大戦後、多くの国家は少数民族を抱える多民族国家であり、同質的で政治的一体感をもつはずの国民は人種的、歴史的、言語的、宗教的、文化的な亀裂—エスニシティの多元性・異質性—によって幾つかに引き裂かれているのが現実の姿となった。

このような多民族、多言語、多宗教国家といわれる様々なエスニック・グループから構成される国家において、彼らを一つにまとめ上げ、国家を運営していくのは簡単なことではないのはいうまでもない。国民としてのナショナル・アイデンティティをどのように形成していくのか。多民族、多言語、多宗教であればあるほど複雑であり、対立を招きやすい。対立は衝突や紛争を招き、最悪の場合、内戦や国家の分裂となることもある。国家の中で覇権的なエスニック・グループは、対立を防ぐため他のエスニック・グループに同化を求めるかもしれない。あるいはエスニックを根拠にマイノリティを隔離するかもしれない。もしくは多文化主義を採用し、それぞれのエスニシティを認め合い、共有できるナショナリズムを持ち出すことで安定を目指すかもしれない。一方で、他の

エスニック・グループやマイノリティの社会開発を置き去りにすることもあるだろう。

マレーシアもまた主要なエスニック・グループである、マレー人、華人、インド人が、マレー語、華語、タミル語を話し、イスラーム、仏教や儒教、ヒンドゥー教をそれぞれ信仰する多民族、多言語、多宗教国家として近代化を進めてきた。その開発政策は、民族や言語、宗教の異なるエスニック・アイデンティティとエスニック・グループから構成される社会構造であることを前提に²、イスラーム化と近代化の両方を進め、主要なマレー人の不満を政策によって抑制することでエスニック・グループ間の衝突をさげつつ、経済の発展という成果を出してきたことは³、第4章で論じたとおりである。

そのマレーシアの住民たちは、独立時、どのようなナショナリズムを持っていたのか、国家として国民が共有するナショナル・アイデンティティをどのように形成しようとしたのかを考える。本章では、まずナショナリズムの概念と定義について概観した後、マレーシアのナショナル・アイデンティティに対するエスニック・グループ、エスニック・アイデンティティの影響力について述べ、さらにマレーシアが推し進めたイスラーム化と近代化政策について考察し、最後に現在のマレーシアにおけるナショナル・アイデンティティについて触れる。

第1節 マレーシアのナショナリズム

(1) ナショナリズムとは

ベネディクト・アンダーソンは、ナショナリズムは特殊な文化的人造物であるとして次のように述べている⁴。

18世紀末におのずと蒸留されて創り出され、しかし、ひとたび創り出されると「モジュール」となって、多かれ少なかれ自覚的に、きわめて多様な社会的土壌に移植できるようになり、こうして、これまたきわめて多様な、政治的、イデオロギー的パターンと合体されていった。

これは、「国民」という発明が政治的、イデオロギー的な中心となり重要性を持った

ことと、「国民」という意識としての新しいナショナリズムの登場を表している。このナショナリズムはヨーロッパを席卷し、アジアやアフリカに広まっていった。

ナショナリズムはおよそ四つの段階を経て発展してきたといえよう。第一段階はフランス革命を契機として、18世紀後半から19世紀にかけてのヨーロッパに吹き荒れた民族国家、国民国家の形成期である。第二段階は20世紀初期の第一次世界大戦前に起こり、戦後のヴェルサイユ体制下で決定的となった三大帝国の解体と諸民族国家の独立期である。第三段階は第二次世界大戦後、とりわけ1960年代に頂点を迎えたアジア、中東、アフリカなど第三世界における植民地支配からの新興諸国の解放・独立期である。第四段階は1980年代以後、冷戦構造の終焉後にいっそう顕著となって今日まで続く民族紛争の激化、国家主権の相対化による民族・国民国家の挑戦の時代である⁵。

ナショナリズムは、国家を形成しようという意識と独立を目指す思想等を意味する⁶。前者は政治的な単位やエスニシティを同じくする集団と国家の繋がりを表す。集団は、ネイションの構成員として自ら規定する。このナショナリズムは時に、国家の規範を国民に押し付けたり、同化を促したりする。また、特定のエスニック・グループの利益を代表する政治的組織により操作されたり、定義が変化していったりすることもある。さらに、ナショナリズムには宗教的な側面がある⁷とする考え方もある。

後者の国家として独立を目指す思想とは、国家や植民地支配に対抗する意思や行動、運動を意味する。アジアでは第2次世界大戦後、このナショナリズムの高まりが多くの国を独立に導いた。人々の共通の歴史的記憶、共通の民衆文化・公的文化、共通の法的権利と義務、そして共通の経済圏の存在がナショナル・アイデンティティへと至る過程⁸となり、反植民地運動の高まりとともにナショナリズム運動、独立運動となる。

さらにナショナリズムは、二つの方向性をもつ。集団においてメンバーのもつ帰属意識、共同体意識といった主観的尺度が、文化、言語などの属性の違いに従って分類される客観的指標に基づくものであればエスニシティに向う。国家や国民としての客観的指標に基づくものであれば、それはナショナル・アイデンティティとなると考えられる。

(2) マレーシア独立時のマレー人のナショナリズム

マレー人のナショナリズムに関する最初の運動は、イスラーム教育の最高権威であるカイロのアズハール大学に留学していた学生による20世紀初頭の汎イスラーム主義と

されている⁹。これに加えてインドネシアとの統合をめざす汎マレー主義、反植民地主義の3つのナショナリズムがマレー人に起こった。次いで、マラヤのなかでも英語教育を受けたマレー人の中に、マレー人の地位を高めるための組織化が進められていった¹⁰。しかし、英語教育とイギリス式の教育を受けたマレー人の多くは王族、貴族の子弟であり、イギリス統治を補助するリーダーに育てられ、統治に関わっていたことから、市井の人々には広くは受け入れられなかった。

1920年代に入り、イギリス統治がほころび始める¹¹と再びマレー人の地位を向上させるための運動が起き始める。またこのころから共産主義運動も広がり始めている。日本の敗戦により1945年9月イギリスがマラヤに復帰し、再びイギリスの植民地となった後、周辺国の独立の機運を感じ取ったイギリスは、「マラヤ連合案」を提案、実施に踏み切った。これは出生地主義に基づきすべての人々、つまり移民である華人やインド人にも市民権を与えるが、統治はイギリス人知事が行うという内容で、イギリス統治制度と大きな違いはなかった¹²。マレー人は、これに反対する形で、PMMCをつくり、反対運動を展開していく。最初はマレー人の王族やエリートたちがその地位を失わないための反対運動であったが、イギリス植民地政府が、華人やインド人に市民権を付与しようとしたことが宗教界や教育界にとって危機感となり、やがてマレー人コミュニティ全体の運動に広がっていく。1946年11月にはPMMCから発展したUMNOが発足した。これは、マレー人たちにエスニック・グループとしての集団を意識させ、マレー人というエスニック・アイデンティティが形成されることに寄与した。そして元来、マラヤはマレー人の土地であるということと、イスラームという宗教的文化的共通点を背景に「マレー人」のナショナル・アイデンティティが醸成されたと考える。

このような運動に対し、イギリス植民地政府は、UMNOらマレー人の主張を認める形で、スルタンの地位の保証、マレー人の特殊な地位を守り、マレー人のイスラームと習慣を守るという「マラヤ連邦」を1948年発足させた。これは、華人やインド人など非マレー系に市民権を与えず、引き続き移民としての地位のまま、イギリスが民族間の分割統治を継続させることを意味した¹³。このある意味成功体験が、のちのマラヤ連邦独立に際して、土着の民であるというマレー人の優位性と、イスラームを核とした宗教的文化的共通点を共有する集団としての意識、イスラーム国家の樹立というマレー人コミュニティのナショナル・アイデンティティの基となっている。

(3) 華人のナショナリズム

マレーシア華人となる当時の中華系住民の中にナショナリズムが高まった最初の時期は、孫文が1900年にシンガポールに赴いて以降、十数回に渡りマラヤや東南アジアを歴訪した頃である。各地にいる華人から革命資金を集める目的であったが、孫文の演説や革命運動は、政治的覚醒という大きな影響を華人たちに与えた。それまで同郷、方言、血縁、職業等幫や会館ごとにエスニック・グループを構成していた華僑コミュニティが、祖国の動向により関心を持ち、祖国「中国」というアイデンティティを共有するようになっていく。現実の就職、結婚など生活面は自身が所属する各「幫」の垣根を超える事はあまりなかったが、各地に祖国「中国」や孫文の理念を受け継ぐべき学校なども設置されるようになり、それまでの「方言」から「華語」が教育言語に採用された。1911年の辛亥革命、清朝の滅亡、翌12年の中華民国の成立にともなって、国民党の支部が、シンガポール、イポー、ペナンなどに建てられた。支部の活動はイギリス植民地政府に禁じられ、翌年閉鎖されたが、マラヤの華僑の間には、孫文の三民主義の思想が浸透し、中国人としての統一された民族意識が覚醒されていった¹⁴。

1920年代に入ると、ロシア革命の影響を受けてアジア地域にも共産主義の運動が広がる。中国共産党が結成され、マラヤでも華僑を中心にマラヤ共産党が結成された。マラヤ共産党は中華系住民の下層労働者と、後続の中国系住民の間に広まり、勢力を拡大していった。その動きは、中国での国共合作や国共分裂の影響を受けながら次第に過激になり、大規模なストライキで植民地政府に経済的な打撃を与えるなどし、後のゲリラ的な反英や抗日運動へと発展していくことになる。

国民党も、マラヤ共産党も各地の会館や総商会、学校や労働者団体などで政治運動を展開していった。また、教育の場面では、すべての華人学校がそれまで行っていた方言での教育に変わって華語教育を取り入れ、中国文化など中国人としてのナショナリズムを教育する場へと変化していった。つまり、当時の中華系住民の帰属意識は、マラヤではなく中国にあった¹⁵とみることができる。

次に、彼らのナショナリズムが高まるのは、祖国中国から居住するマラヤへの帰属意識の変化の時期である。きっかけは、①1948年のマヤラ連邦の発足により、マレー人優位の体制が認められたこと、②1949年、共産党による中華人民共和国が誕生し、台湾に逃亡した国民党により中華民国が誕生したこと、③植民地政府がマラヤ共産党のゲリラ

対策として、中国系の不法居住者を「新村 (New Villages)」に入植させ、隔離し、ゲリラの弱体化を図ったこと、④華僑・華人イコール中国共産党・マラヤ共産党という評価を嫌った海峡華人や 19 世紀に大量に移民した中で富や地位のある上層階級の中華系住民たちが、新たな政治集団 MCA を結成したことによってである。MCA は、(1) 華人の権利の擁護、(2) 民族間の調和、(3) 雇用機会の平等、(4) 社会正義の確保、(5) 華語の使用と教育の保持などの目的を掲げ、やがて UMNO との連合を図っていく。MCA は、海峡華人と上層階級の中華系住民たちを結びつけた上で、マラヤに帰属する集団としての意識を高め、華人コミュニティとして結束を強化していった。こうして、1957 年の独立へ向けて、華人の帰属意識はマラヤへと急速に変化していった¹⁶。

(4) マレーシアの発足時のエスニック・グループの動向

マラヤ連邦が発足した 1948 年ころ、非マレー系住民は華人の組織する MCA とインド人が組織する MIC が、それぞれ権利の保護や民族間の融和と平等を目標に活動を始めている。こうしてマレー人、華人、インド人はそれぞれのエスニック・アイデンティティと利益を得るために、政治組織としての UMNO、MCA、MIC らがマラヤの独立へ向けて協力することとなる。

マラヤ連邦の独立へ向けた動きは平和的に進められた。UMNO の第 2 代総裁で後の初代首相となるラーマンは、植民地政府と話し合いを重ね、1955 年に選挙を実施、UMNO、MCA、MIC の連合党は勝利する。こうしてマレー人の UMNO を中心に、同調する MCA、MIC をパートナーとする体制は、およそ 50 年間続く¹⁷こととなる。

マラヤ連邦は 1957 年 8 月 31 日、ムルデカ (独立) を達成した。その特徴は、①9 人のスルタンが交代で首長となる立憲君主制、②イスラームを国教とする、③10 年後にマレー語を公用語とする、④市民権としてマレー人の特殊な地位を守り、非マレー人については、市民権や選挙権の取得に条件が設けられたことにある。憲法で法の下での平等を定めながら、同時にマレー人と非マレー人の区別をつけることで、エスニック・グループによる二分化を規定した¹⁸。マラヤ連邦は 1963 年、サバ、サラワク州やシンガポールを含むマレーシア連邦となるが、華人が多数を占めるシンガポールは 1965 年には分離、独立する。これはマレーシアの華人グループにとって大きな禍根となった。

1957 年以来、マレーシアは、各エスニック・グループが形成する政党の連立によって

統治されてきた。UMNO、MCA、MIC の連合であるが、それは実際には、マレー人・イスラーム優先主義の象徴でもある。UMNO は、創設以来この政党内で支配的な団体であり、国民文化としてマレー文化を、国家の公式な宗教としてイスラームを掲げてきた。これに対し、MCA と MIC は、華人やインド人の権利の擁護と、彼らがマラヤに築いてきたコミュニティを守りつつ、エスニック・グループ間の調和を重んじ、UMNO と協力することで、彼らの目的を果たすことを目指した。

第2節 エスニック・グループの衝突とナショナル・アイデンティティの再構築

(1) 5.13 事件の対立

マハティールは、独立直後のマラヤに、マレー人と非マレー人の間に、しっかりと根を張った真の人種的調和が決してなかった、という¹⁹。

人種間の争いは頻繁にはなかった。互いの寛容はあった。譲り合いの関係はあった。ある程度のギブアンドテイクはあった。しかし調和はなかったのである。弱くはあったが、なお聞き取れるほどの不協和音が事実あった。そして、定期的に不協和音が高まり、局地的なあるいは広範囲に及ぶ人種的な争いとなって爆発した。

1969年5月総選挙の結果を受けて、5月13日、デモ隊が暴徒化し、華人とマレー系住民のエスニック・グループによる大規模な衝突が起きる。後の政府発表によると死者196人、負傷者439人という大惨事であり、マレーシア史上最大の危機となった。政府の機能は一時麻痺し、全土に非常事態が宣言された。この事件によりラーマンは翌年、失脚する。

マハティールが指摘しているように、原因はエスニック・グループによる対立と不満の蓄積にあったことは数多くの検証が示している²⁰。具体的には、マレー人、特に農業、漁業といった第1次産業に従事するマレー人は華人が独立以前から経済力を持ち、独立後もその構造が変わることなく、マレー人との経済格差は開いたままだったことに不満を抱いていた。一方の華人、あるいはインド人には、国教としてのイスラーム、マレー

語の国語化、マレー人に優位な社会構造に対する不満が高まっていたといえる。また都市部と地方の格差も原因の一つだとの指摘もある²¹。

(2) 政策転換とブミプトラ政策

5.13 事件は、第 2 章で経緯を取り上げたが、1969 年の総選挙で与党が大敗したことをきっかけに、自らの言語、教育、文化を守り、平等な地位を求める華人やインド人のグループと、マレー語やマレー人の特殊な地位を強化したいマレー人との対立によって引き起こされた惨事である。そして、マレーシア史上最初のマレー人対華人のエスニック・グループ間の衝突となった。

この事件は、政治的体制に大きな影響を及ぼした。第一党、UMNO の立場に変わりなかったが、マレー人主導を主張する強硬派のマハティールの台頭を促し、ラーマンからラザクへの権力移行が進むことになる。

ラーマンは、バランスのとれた政治家であり、1957 年のマラヤ連邦独立以来、第一代首相として UMNO をマレー人の政党として主導するとともに華人の政党である MCA、インド人の政党である MIC との連携を進め、マラヤ連合党を民族協調の党として作り上げる。最初の内閣では民族構成に呼応する形でマレー人 6 人に対し、華人 3 人、インド人 2 人を入閣させるなど、多民族国家としての協調に努めていた²²。

5.13 事件の責任を問われる中、ラーマンは暴動の原因は共産主義者による脅威によるもので、マレーシアの華人は共産主義者ではなく、国外の勢力が引き起こしたのだと主張し、民族間の協調を訴えた。しかし、マレー人の中の不満は収まらず、ラーマンは 1970 年 9 月に辞任し、ラザク副首相が首相に昇格した。ラザクは、国内でのエスニックな対立を強調し、5.13 事件の責任は華人側にあるとの見解を展開、マレー人の権利拡大を目指すこととなる。

まず、新経済政策においてマレー人のあらゆる分野における参入の促進、優遇を進めた。マレー人企業への優先的な融資やマレー人の雇用の拡大、教育も優先化させる。これが「ブミプトラ政策」といわれる世界的にも類を見ない唯一のエスニック・グループだけに特化したマレー人優遇制度である。

1971 年には憲法を改正し、市民権、マレー人の特権、他の民族の合法的地位、国語、スルタンの地位についての一切の言論の禁止（以下、「敏感問題」とする）、高等教育に

おけるマレー人の比率を高めること、マレー語をすべての公共出版物に使用すること、サバ・サラワクの先住民にもブミプトラとしてマレー人と同じ特権を付与することなどが決められた²³。このことにより華人とインド人は非ブミプトラとしてこれまで以上に阻害されることとなった。この敏感問題は、今日までエスニック・グループ間のわだかまりとして暗い影を落としている。

マレーシアの国民統合は、マレー優先主義の流れとイスラーム化の下、マジョリティのマレー人を優遇する政策の強化によってさらに複雑になってしまった。このマジョリティのためのアファーマティブ・アクション政策は、マイノリティの華人とインド人を周辺化するためだとの批判や、政策の乱用であり、人種差別的であるという非難もある²⁴。

(3) イスラーム化政策の強化

1980年、マハティールが第4代首相となる。このころ、ブミプトラ政策による恩恵を受け、豊かになった者とそうでない者との格差からダーワ運動が広がっていた。ダーワ(ダアワ)とはイスラームに回帰し、正しい人生を送ることを意味するアラビア語で、イスラーム復興運動の一つであるが、当時の政権は反政府運動につながることを警戒した²⁵。

こうした中で、マハティールは、ブミプトラ政策を継続しつつ経済発展と近代化を促進する「自由・穏健派イスラーム」²⁶へとシフトする。同時に反西洋、反米的な姿勢をとり、日本や韓国に学べと説く「ルック・イースト政策」²⁷も採り入れる。これは、欧米的でない発展を目指すアジアのイスラーム新興国家として、マレーシアに新たな存在感を与え、国内を刺激することにつながった。

マハティール政権下で進められた国家主導のイスラーム化政策は、政府や行政機関にイスラーム指導者ウラマー (*ulama*) を配置し、教育機関、法律、裁判所といった国家機構のイスラーム化を促した。またイスラーム指導者は、政府の目指す方向へイスラーム的な解釈を加えることで文化的にも宗教的にも政府の指導力を補完するような役割を担った。1990年代、マハティールの指導者としてのカリスマ性も合わさり、マレーシア政府の中央集権化が進み、好調な経済が新経済政策の巨大プロジェクトを推進することで工業化と近代化が進んだ。非ムスリムも経済的発展の恩恵を享受できることから、

イスラーム化はエスニック・グループの表立った抵抗もなく進められていった。社会経済的な発展は国民、特にムスリムに消費主義や物質的なライフスタイルをもたらし、都市の中産階級を拡大させた。マレー人コミュニティだけでなくマレーシア社会、グローバル社会を意識する文化的な変化が起きたのである²⁸。

一方で、イスラーム化は、表現や行動の自由の範囲を狭めることになる。しかし、非ムスリムであり、非ブミプトラである華人やインド人は、それぞれの社会的文化的アイデンティティを失うことなく、マレー人優遇制度が継続する中で、主に経済的な恩恵を受けつつ、マレーシアの国家としての国際的な地位の向上と、急速に進むグローバル化の中に活路を見出していった。

繰り返しになるが、1980年代から始まったマレーシアのイスラーム化は、次のような事項を目指すものであった。まず、①保守的なマレー人の思考を近代的なものに転換させ、②イスラーム指導者を政府や行政機関に取り込みイスラームの近代的な解釈を発展させ、発信し、また③西洋的な脅威に対し、新イスラームを打ち出すことで、近代化し発展したムスリムの国であることをアピールし、④経済的にも文化的にも国際社会での地位を向上させ、⑤保守的なあるいは原理主義的なイスラーム勢力の台頭を抑え、⑥ムスリムも非ムスリムも国民がマレーシアという国家に誇りと自信を持つ豊かな社会を形成することが目的であった。

第3節 マレーシアのナショナリズムについての再考

マラヤが独立した当初、居住する人々のナショナリズムは、エスニック・グループごとのエスニック・アイデンティティを基にした不安定なナショナリズムであったことはすでに述べたとおりである。建国時にイスラームを国教とすることで、ムスリム、つまりマレー人の政治的、イデオロギー的優位性を守ってきた。またマレー人の優遇政策により社会的、文化的な地位も優位に保ってきた。華人やインド人にイスラーム化や社会的な同化までは強制しなかったが、相互理解を図る政策も行っていない。エスニック・アイデンティティの融合はなく、ナショナル・アイデンティティへの進化も不発におわった。あいまいなままのエスニック・グループ間の関係は、5.13事件後に、マレー人優遇体制の補完という形で強化され、マレー文化が上位に、華人やインド人は下位の存在

として位置づけられたことにより、マレーシアのナショナリズムは後退してしまったとさえいえるかもしれないからである。

その後マレーシア政府は、マレー人優遇政策を継続しながら、①植民地政策や西洋的文化を脅威として、②柔軟で発展的なイスラーム化を進める一方で原理主義的なイスラームには距離を置く姿勢をとり、③経済的に発展した国家像を具体的に達成し国民に実感させていくことで、マレーシアに対する愛国的な雰囲気醸成し、ナショナリズムの形成を促そうとした。

マレー人優遇政策については、21世紀になり急速なグローバル化の中で、マレー人の競争力や能力の低下やマレー人同士の格差という問題が起き、そのことが国の経済力低下につながりかねないとの懸念から、言語政策の転換や非マレー系企業への資本比率の規制緩和など、少しずつではあるが転換も見られる。しかし、進学や官公庁への就職などで、華人やインド人は大きなハンデを背負ったままである。あいまいなエスニック・グループごとの関係や、「敏感問題」の取扱いに対する禁止事項など解決されない問題に対しては、政府の積極的な介入は全く見られない。

例えば、若い世代の華人は、生活用語は母語である中国語方言を用いながら、華人同士は華語で、英語を母語とする華人には英語で、マレー人、インド人とはマレー語、時には英語で会話をするといった日常の多様性のなかで、マレーシア華人という新たなアイデンティティを完成させつつあるのかもしれないが、それを立場の異なるマレー人の友人と共有できているといえるだろうか。

マレーシアが今後、多元的な国家の枠組みとして、マレー人も華人もインド人も自らの居場所を見出すことができたとしたら、ナジブ首相（当時）が目指した、真の「ワン・マレーシア」となるのではないかと考える。

むすび

19世紀、自由と権利を求めたフランス革命は、国民が国の担い手になるという機運が高まり、その成功体験がフランスのナショナリズムを支えている。そのフランス革命に影響されたドイツは、同じ言語、伝統、血統のつながりに帰属意識を訴える形でドイツ帝国をフランスに認めさせ、学校制度や言語教育などで国民意識を醸成していった。

20 世紀になり東南アジア、南アジアでもナショナリズムの高まりとともに、独立国家形成の機運が高まっていった。インドネシアはスカルノやハッタらが鼓吹したナショナリズムが実を結び、オランダとの独立戦争の結果、1950 年にインドネシア共和国を建国した。インドは、宗主国イギリスが度重なる大戦で国力が低下していたこともあり、ガンディーやネルーによる無血の独立を果たした。しかし、民族および宗教問題で対立し、ヒンドゥー教を信仰するインドと、イスラームを信仰する南北パキスタン（南パキスタンは後のバングラディシュ）と国を分かちことで国家としての安定を図ってきた。それでもなおインドは多民族多言語国家であるが、ヒンドゥー教を主に、また歴史的な文明、時代や文化習慣も背景にインド人としてのナショナリズムを形成している。

これに対して、マレーシアは、インドと同じくイギリス植民地化にある中で、武力闘争ではなく宗主国との話し合いにより、その容認の下、独立を果たした。マレー人主導であったが、当初よりエスニック・グループ間の協調のためエリートを中心とする政党間で妥協しあい、平和的な独立の道筋をつけてきた。しかしそのことが、階級やイデオロギーの対立を潜在化させる代わりに、民族間の対立を顕在化させたともいえる。それは、マレーシアの独立がインドネシアのようなナショナリズムの高まりではなく、マレー人、華人、インド人それぞれがその地位を守り、地位を向上させていく運動として展開されていたからに他ならない。独立後の政治も、エスニシティを基礎として動いていたといえる。

マラヤ連邦は 1963 年、サバ、サラワク州やシンガポールを含むマレーシア連邦となるが、華人が多数を占めるシンガポールは 1965 年には分離、独立する。この期間、マレーシアではナショナル・アイデンティティに関する動きはほとんど見られない。その後も強固なエスニック・グループの社会構造が変わらないまま、農業を中心とした経済発展に重点が置かれてきた。5.13 事件後は、新政権の強いリーダーシップの下、華人やインド人からの自由な発言や主張を抑制し、イスラームの下にマレー人を優遇する政策を採ることで国内の安定を図り経済発展を果たしてきた。そして新興イスラーム国家として、多くのイスラーム諸国のなかで影響力を強め、国際社会で存在感も増してきたといえる。

マレー人のナショナリズムは、イギリス植民地統治の終焉期に起きた、マレー人としてのエスニック・アイデンティティに、独立という事象が加わることで、土着の民であるというマレー人の優位性と、イスラームを核とした宗教的文化的共通点を共有

する集団としての意識、イスラーム国家の樹立というマレー人コミュニティのナショナル・アイデンティティが醸成された。一方、華人のナショナリズムは、彼らの帰属意識が、様々な要因により祖国中国からマラヤへと変化し、華人コミュニティとしての結束の強化によるエスニック・アイデンティティが醸成され、そして、マラヤに帰属する集団として、存在感を増すことで醸成された。インド系も同様に、彼らの帰属意識がマラヤへと変化することで、エスニック・アイデンティティにも変化が生じ、政治参加することで、マラヤのインド系にとってのナショナル・アイデンティティが高まったと考える。このように、マレーシアは独立時におけるエスニック・アイデンティティの融合はせず、マレーシア人としてのナショナル・アイデンティティへの進化も果たせず、あいまいなままのエスニック・グループ間の関係は、シンガポールの独立と、5.13 事件によって、転換期を迎えた。マレー人優遇体制の補完という形で強化され、マレー文化が上位に、華人やインド人は下位の存在として位置づけられたことにより、マレーシアのナショナリズムの形成はさらに遅れる。

しかし、華人、インド人はしたたかに自らの地位を築き、堅持し、複雑な帰属意識と折り合いを付けながら、マレーシアの発展に貢献しつつ、ナショナル・アイデンティティを醸成してきた。近年になり、人種的・エスニック的な差異を強調しない論調が生まれていることは、近代的で、グローバル化し、進化した、そしてとりわけ民主主義と人権を価値付け、擁護するマレーシア像をみせる 1 つの現象といえる²⁹。マレーシア国民は、独立より 60 年を経て、ようやく、マレーシア人として共有できるナショナルリズムを、内面化してきたのではないだろうか。

注

- ¹ 小平修『エスニシティと政治』ミネルヴァ書房、1999 年、131～132 頁。
- ² 田崎亜希子「多民族国家・マレーシアを構成するエスニック・グループの社会文化的背景」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第 9 輯、2016 年、85～93 頁。
- ³ 1980 年代から 2008 年半ばまで、経済成長率はおおよそ 5%前後で推移していた。2012 年には一人当たりの GDP が 10,000 ドルを超えている。IMF - World Economic Outlook Databases, 2016, 10 <<http://www.imf.org/external/ns/cs.aspx?id=28>>
- ⁴ Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso, 1983. ベネディクト・アンダーソン著、白石隆、白石さや訳『想像の共同体』リブロ

-
- ポート、1987年、14頁。
- 5 小平、前掲書、139頁。
 - 6 Thomas Hylland Eriksen, *Ethnicity and Nationalism*, 2nd, London: Pluto Press, 2002. トーマス・ハイランド・エリクセン著、鈴木清史訳、『エスニシティとナショナリズム』明石書店、2006年、187～196頁。
 - 7 同掲書、204～207頁。
 - 8 本多周爾「ナショナル・アイデンティティを再考するー日本からの視点を中心に」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第6輯、2013年、17～29頁。アイデンティティは国家・社会、国民へのナショナル・アイデンティティへ至ると論じる一方で、新興国家においてエスニック・アイデンティティが必ずしもナショナル・アイデンティティとなるわけではないとしている。マレーシアにおいても華人におけるナショナル・アイデンティティは希薄であった。
 - 9 萩原宜之『現代アジアの肖像 14 ラーマンとマハティール: プミプトラの挑戦』岩波書店、1996年、25頁。
 - 10 シンガポール・マレー人組織 (*Kesatuan Melayu Singapore*) がこれにあたる。マレー人者最初の政治組織だった。
 - 11 イギリス人駐在官とスルタンの権限をめぐる対立や 1929年の世界恐慌でゴムの価格が下落し影響力が低下した。
 - 12 イギリスは外貨の稼ぎ頭であるマラヤを手放したくなかったため、スルタンの権限をイスラームと慣習に関する範囲にとどめ、イギリス国王の下で各州に配置されるイギリス人知事が行政を握るというものだった。萩原、前掲書、56頁。
 - 13 田崎亜希子「マレーシア中華系住民の移住と定住の歴史過程」『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第7輯、2014年、117～127頁。
 - 14 萩原、前掲書、74～76頁。
 - 15 金子芳樹『マレーシアの政治とエスニシティ: 華人政治と国民統合』晃洋書房、2001年、41～46頁。
 - 16 田崎、2014、前掲書、120～121頁。
 - 17 1959年の最初の総選挙から2008年の総選挙まで、BNは下院(*Dewan Rakyat*)において222の議席の内、2/3を占めてきた。
 - 18 金子、前掲書、82～93頁。
 - 19 Mahathir Bin Mohamad, *The Malay Dilemma*, Singapore: TBI, 1970. マハティール・ビン・モハマド著、高多理吉訳『マレー・ジレンマ』勁草書房、1983年、8頁。
 - 20 金子、前掲書、267～304頁。山田満『多民族国家マレーシアの国民統合: インド人の周辺化問題』大学教育出版、2000年、112～118頁。Lee Kam Hing, “Malaysian Chinese: Seeking Identity in Wawasan 2020”, Leo Suryadinata (ed.), *Ethnic Chinese as Southeast Asians*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 1997, pp.87-90.
 - 21 山田、前掲書、113～118頁。
 - 22 萩原、前掲書、62～71、76～81頁。
 - 23 金子、前掲書、292頁。
 - 24 Gaik Cheng Khoo, “Introduction: theorizing different forms of belonging in a cosmopolitan Malaysia”, Gaik Cheng Khoo and Julion C. H. Lee (eds.) *Malaysia's New Ethnoscapes and Ways of Belonging*, London and New York: Routledge, 2016, pp.1-2.
 - 25 萩原、前掲書、158～165頁。
 - 26 濱四津菊枝「UMNOによる「親米的」対応策: 「自由・穏健派イスラーム」の守護者として」JAMS News No.22、2002年。
 - 27 マハティール、前掲書、263～267頁。
 - 28 Kikue Hamayotsu, “26 Islam and Nation building in Southeast Asia: Malaysia and Indonesia in comparative perspective”, Allen Hicken (ed.), *Vol. II, Civil Society, Ethnicity, and Religion, in Politics of Modern Southeast Asia: Critical Issues in Modern Politics*, London and New York: Routledge, 2010, pp.272-290.

²⁹ Gaik, op. cit., pp. 1-2.